

中高生とともに差別と闘う

『立入禁止』の向こう側

吉成タダシ (うずしおブランチ代表)



豊かな島・豊島

香川県に豊島(てしま)という島があります。小豆島の西に位置する小さな島です。車で一周しても十分もかからないような島です。

現在、島の人口は六百人ほどですが、かつてはその十倍くらいの人々が暮らしていたそうです。小さな島のほとんどが山で、平地はごくわずか。にもかかわらず、それだけの人口が生活できていた。いったい食料は?ここに、「豊かな島」と言われる所以があります。

小さな島の中央部にそびえる壇山の高さは、東京タワーを越えます。湧き水が溢れることのない、水の豊かな島なのです。古から人々は田畑を開墾し、島の食を支えてきたといえます。「豊島棚田」で検索してみてください。瀬戸内の海をバックに、山の斜面を開墾した棚田の映えた画像がたくさん出てきます。

この豊島に、昨年何度もお邪魔しました。理由があります。この自然豊かな島には、大量のゴミが持ち込まれた歴史があります。「豊島産業廃棄物不法投棄事件」です。

事件は、今から五十年前も前の、一九七〇年代に端を発します。しかし、私が本当に関心を持ったのは、三十年ほどを経た二〇〇〇年に放送されたドキュメント番組でした。近くで起こっていることながら、しかも私自身もゴミを出している当事者であり加害者でありながら、関心を持たなかった、知ってもいなかったことがあまりにもショックで、抜けない

棘のように、ずっと私のなかに刺さったままだったので。

それともう一つ。昨今、SDGsが脚光を浴びていますが、この事件が、日本のSDGsの先駆的な存在なのではないかと感じていたものの、その部分についてはどこからも語られないことに大きな疑問を抱いていたのです。

「今、豊島はどうなっているのだろうか?」そのことが気になり、昨年、初めて豊島を訪れました。

『立入禁止』の向こう側

初めて訪れる、何も知らない、誰も知らない島。向かう先はただ一つ。不法投棄されていた現場。レンタサイクルで砂利道を辿っていくと、道は鉄柵で阻まれてしまいました。そこに大きく赤く、「立入禁止」の文字。

そのあとは仕方なく、瀬戸内国際芸術祭の作品を観たり、お洒落なレストランで昼食をとったり、レンタサイクルで島を一周したり。それが私にとっての豊島デビューでした。

数ヶ月後、再びの訪問では、民泊をしました。そのときのご主人に紹介を受けたのが、元香川県議石井亨(とある)さんでした。ゴミ問題を解決するべく立候補し、二期務めた、当時を知る島の住民でした。

石井さんの案内で「立入禁止」の向こう側に足を踏み入れます。誰も撤去できるとは思っていなかった、九十トンを超えるゴミの山。撤去された跡地を眺め、午前をかけて当時

の豊島について、また今の豊島について、みっちり話を聞かせていただきました。昼食を一緒に過ごしていただきながらも、そして午後からも、さらに詳しく話を聞かせていただきました。それは、大切な何かがかぼれ落ちそうになるのを何とか防ぎながら、ただのつも聞き漏らすまいという心持ちでした。話の内容があまりにも衝撃的すぎて、聞き漏らししてしまうことが憚られたからです。

この国のありようを問う

「今の自分たち」ではなく、「未来の子どもたち」に豊かな自然を残したいと思いついた、多くのお年寄りたちが、生活を、財産を、命までも引き換えにした闘い。にもかかわらず、子どもたちは修学旅行で訪れたドーム球場で、「香川県豊島中学校」と紹介されると、「お前らはゴミの上を通学しているのか」と馬鹿にされたと言います。いったい子どもたちに何の罪があるというのか。この罪を背負わせているのはいったい誰なのか。

そのうち、「豊島の生まれ」であることを知られたくない島出身者も出てきたと言います。これはこの島の人たちが背負うことなのか。

話は、公害調停へと導いた「鬼の中坊」の話にもなりました。森永ヒ素ミルク事件や豊田商事事件に携わった、故中坊公平弁護士です。そこに出てくる話の一つ一つがあまりにも壮絶で、私はこの歴史を今、あらためて伝えたいと思い、豊島を題

材にした小説を書きはじめました。「光跡 #ボクラの島の」です。それがこのたび、第四十八回部落解放文学賞で佳作に選んでいただけました。ありがたいことです。

先日、受賞報告を兼ねてあらためて民泊し、ご主人や石井さんとささやかな祝杯をあげました。そのおりに石井さんが言われた言葉が印象的でした。

「産廃跡地を、干潟の自然再生のランドマークにしたい」

何と夢のあるプロジェクトか。瀬戸内以外でもそうかもしれないませんが、開発の名の下、各地で護岸工事がされ、日本の多くの干潟が姿を消しました。そんな干潟の減少が、近年、近海での漁獲量が激減した一因とも言われています。ところが開発はされたものの、未利用のまま放置された開発地も多くあるのだそうです。それを自然海浜に再生できないか、豊島がそのランドマークになりはしないか、というものです。それには途方もなく多くの時間と金を要します。が、無駄な公共事業の見直しとともに、この国の持続可能な社会のありようを提起するランドマークになれば、と強く共感しました。

私が深く感銘を受けた、石井亨さんの著書、「もう『ゴミの島』と言わせない」(藤原書店三〇〇〇円)は、運動や司法の視点からも、政治や行政の視点からも、また農業や漁業、教育の視点からも、大変示唆に富んだ良書です。みなさんも是非手にとってご覧になってみてください。